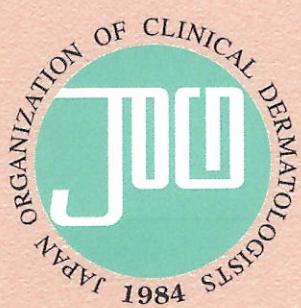


ISSN 1349-7758

日臨皮会誌  
J.JOCD

# 日本臨床皮膚科医会雑誌

JOURNAL OF THE JAPAN  
ORGANIZATION OF CLINICAL DERMATOLOGISTS



Vol.41, No.2, 2024 (R6.4.5号)

## 第40回日本臨床皮膚科医会総会・ 臨床学術大会



### ———— プログラム／抄録集 ———

会期：2024年4月20日(土)・21日(日)

会場：ライトキューブ宇都宮（宇都宮駅東口交流拠点施設）  
栃木県宇都宮市宮みらい1-20  
028-611-5522

会頭：岡田 嘉右衛門（岡田皮フ科耳鼻咽喉科クリニック）  
副会頭：齊藤 浩（はこのもりクリニック）

事務局長：菅井 順一（菅井皮膚科パークサイドクリニック）  
実行委員長：馬場 安紀子（馬場医院）

プログラム委員長：大槻 マミ太郎（自治医科大学）

財務委員長：相原 良子（あい皮膚科クリニック）

運営事務局：公益社団法人日本皮膚科学会内

大会運営部 運営チーム

第40回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会

〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-4

TEL: 03-3811-5079 / FAX: 03-3812-6790

E-mail: jocd40@dermatol.or.jp

URL: <https://jocd40.jp/>

日本臨床皮膚科医会  
<http://www.jocd.org>

スイーツセミナー2 4月20日（土）14:40～15:40 第3会場 2F 大会議室202  
多汗症・酒さ～患者さんのための診療ポイント～

## スイーツセミナー2

座長 大嶋雄一郎 / 相原良子

### SS2-2 明日から実践！ 酒さおよび類縁疾患の診断と治療

延山 嘉眞

東京慈恵会医科大学 皮膚科

酒さやその類縁疾患は大学病院ではほとんど目にしないが、多くの一般皮膚科・美容皮膚科のクリニックでは、同疾患を有する患者さんが存外に多いことに気づいた。アトピー性皮膚炎のプロアクティブ療法が普及するにしたがって、長期にわたり局所免疫を抑制する外用薬を使用する機会が増えたことも一因かもしれない。

酒さは頬部、鼻部、前額部を中心とした炎症性皮膚病変を特徴とする慢性疾患である。皮膚症状として、持続的な顔面の紅斑、丘疹、膿疱、毛細血管拡張、再発性の潮紅および鼻瘤が生じる。顔面の症状が慢性化することにより、審美的な側面から自己評価を低下させ QOL を著しく損なうこともある。酒さは主に30歳以降に診断され、女性は男性より高頻度に罹患する。酒さの発症頻度は報告によつて異なり、32報の文献を基にしたメタ解析では、成人の0.09%～24.1%が罹患すると試算されている。日本人では信頼に足る疫学データに乏しいが、前述のとおりクリニックではしばしば遭遇する疾患であり、診断がつかず見逃されている可能性がある。

酒さの診断については、国際的な酒さの研究機関である National Rosacea Society が2002年に診断基準を提示し、今日でもこれが広く踏襲されている。この診断基準では、酒さは臨床的特徴と臨床経過によって診断される。一方、もう1つの国際的な酒さの研究機関である global ROSacea COnsensus から、2017年に特徴的な表現型をベースにした診断へのアプローチが提唱された。日本皮膚科学会の「尋常性痤瘡・酒皶治療ガイドライン2023」でも、これら海外での潮流を受け、酒さの症候に合わせた実践的な治療を提案すべく、症候別病型分類に基づいた clinical question が設定された。

本講演では、酒さおよび類縁疾患について本邦の現状を踏まえた適切な診断・治療について、実臨床の観点からも紹介したい。

#### 経歴

- 1998年3月 東京慈恵会医科大学卒業
- 2000年4月 東京慈恵会医科大学皮膚科学講座助手
- 2005年4月 国立がんセンター研究所 リサーチアソシエイト
- 2008年4月 東京慈恵会医科大学皮膚科学講座助教
- 2008年9月 学位（医学博士）受領
- 2013年4月 東京慈恵会医科大学皮膚科学講座講師
- 2017年2月 東京慈恵会医科大学皮膚科学講座准教授
- 2021年4月 東京慈恵会医科大学皮膚科学講座教授
- 現在に至る

共催：マルホ株式会社

シンポジウム 25 4月21日（日）13:50～14:50 第7会場 1F 小会議室 107+108  
看護師と皮膚科医のコラボから生まれるもの

## シンポジウム 25

座長 相原良子 / 嶋岡弥生

### SY25-2 酒さ患者に対する診察介助の実際

荒川 摩衣

あい皮膚科クリニック（宇都宮市）

酒さとは顔面に毛細血管拡張や持続性の紅斑、丘疹・膿疱などを生じる慢性炎症性皮膚疾患である。COVID-19 のパンデミックによってマスクが常用化した 2020 年以降、むずむずとした瘙痒と紅色丘疹を訴えて受診する患者が当院において目立つようになった。その中には酒さと診断しうる症例が多数含まれたため、診断および治療のアプローチをプロトコール化することで対応した。2022 年に経験した当院における酒さの症例 100 例程度を「酒皶アトラス」（中外医学社：2022）に掲載したので興味のある方は参照されたい。当院での酒さ患者の診察では、医師の診察後、他覚所見の時間経過を観察するため、看護師が re-Beau2（JMEC）にて顔面全体を撮影する。re-Beau2 は、一定の照明環境下で撮影することが可能であるため、気象条件などの環境因子に左右されず、同一条件で皮疹を視覚情報として記録することができる。撮影後、自覚症状を把握するため、かゆみ、ほてり、灼熱感、過敏性の 4 つの項目につき visual analog scale スコアを使用し、看護師が患者のスコアの記載を促す。また、毛包虫の有無を顕微鏡検査で確認するため、医師が病変部より非観血的に検体を採取する行為を介助する。医師による治療方針の決定、および、病態と治療方法の説明の後に、看護師が外用剤の外用頻度、外用部位、外用量について説明する。さらに、デモンストレーションとして外用処置を行い、約 10 分後に外用剤による刺激感の有無を確認している。このとき、スキンケアや洗顔の方法について患者の皮膚の状態に応じて説明を加える。特に本邦において酒さに対して保険適用される外用治療は、イオウカンフルとメトロニダゾールしかない。この 2 剤は共に刺激反応が問題になることも多いため、予見される外用剤の有害事象への対応を医師とともに予め説明することが重要である。当院では、治療開始 2 週間後、2 ヶ月後、3 カ月後、6 ヶ月後、および 1 年後の診察時に、初診時と同様に、上記のプロトコール化された診療の中で自覚症状や他覚所見を把握し、治療介入後の変化を患者と共有する。医師だけでなく、看護師のきめ細かい介助や外用指導は、治療の安定した継続の重要な一助になると考えている。

#### 経歴

- 2018 年 報徳看護専門学校卒業  
2018 年 報徳会宇都宮病院勤務  
2020 年 あい皮膚科クリニック勤務

## シンポジウム 25

座長 相原良子 / 嶋岡弥生

### SY25-3 美容皮膚科患者に対する診療介助の実際

追立 智美

あい皮膚科クリニック（宇都宮市）

当院では「内面と外面から健康で美しく」のコンセプトのもと、肝斑、老人性色素斑、痤瘡、毛穴開大、酒さなどに対する美容治療を行っているが、あくまでも公的保険が適用される治療に付加する治療として位置づけている。その際、医師とともに患者個々の症状や背景を鑑みて、オーダーメイドで計画を立てる必要がある。医師によるカウンセリングの前に看護師が担う重要な役割がある。まず当院ではカウンセリング前に看護師が re-Beau2 (JMEC) を用いて臨床写真を撮影する。撮影後に写真を患者に見せることにより症状を客観視してもらいつつ、主訴、紫外線の曝露程度などの生活環境、および、期待する治療結果を詳細に聴取し、医師によるカウンセリングが円滑に行われるよう努めている。医師によるカウンセリングでは看護師が立ち合い、医師とともに患者の悩みを的確に把握し、個別化された治療計画の提案を介助する。カウンセリングでは、ダントンタイムや治療期間、注意事項、および、料金についても説明するが、その説明により患者が納得したうえで治療に臨めるようサポートしている。医師によるカウンセリング後には、カウンセリング中に患者を注意深く観察することにより、患者が理解に至らなかった可能性がある点を再度確認し、医師の行った説明を補足する必要がある。医師による美容治療の施術では治療が安全かつ効果的に遂行できるように、医師の指導のもと、治療を介助する必要がある。一方、看護師が行う施術では、安全に施術できるように定期的にトレーニングを行ったうえで、毎回医師に治療内容を確認後に慎重に施術している。施術後のアフターケアにおいても看護師が重要な役割を担う。予見される施術後の反応（発赤など）およびその対処法に関して事前に説明し、治療効果の向上やトラブルの回避に努めている。施術前後ばかりでなく、日々のスキンケアの指導も看護師の重要な役割である。正しい洗顔法の指導から患者の肌質に合った化粧水や乳液、サンスクリーンの選択など毎回丁寧に確認することにより、良いコンディションを保ち、より効果的で安全な美容治療を継続することにつながると考える。

#### 経歴

- 2002年 獨協医科大学病院付属看護学校卒業
- 2002年 獨協医科大学病院勤務
- 2006年 共立美容外科勤務
- 2013年 あい皮膚科クリニック勤務